

「癒しと安らぎの環境」フォーラム 2024

式典・懇親会・チャリティコンサート リポート



サントリーホール・大ホールの舞台上に並ぶ受賞者

医療・福祉施設に於ける癒しの環境作りを顕彰、普及を図る「癒しと安らぎの環境」フォーラムが、集中出版株式会社主催の下、2024年12月8日にサントリーホールで開催された。「癒しと安らぎの環境賞2024」の表彰の他、「集中医療大賞2024」「集中医療大賞・高久史磨特別賞2024」等、各賞の表彰が行われ、各界で活躍する理事らが登壇し、医療現場に於ける「癒し」の重要性を訴えたと共に、受賞者の功績を称えた。又、開会に際しては、日本赤十字社医療センターの中島淳院長によるピアノ演奏も披露された。

アートや音楽を取り入れる事で、癒やしと安らぎの環境作りを積極的に推進する医療・福祉施設を表彰する「癒しと安らぎの環境賞2024」は、「四国こどもとおとなの医療センター」「聖マリアンナ医科大学病院」「筑波メディカルセンター病院」「東京かつしか赤十字母子医療センター」「耳原総合病院」の5つの医療機関が受賞した。

同時に表彰を行った「集中医療大賞2024」は、長年に亘り卓越した専門知識と使命感を持って取り組み医療界の発展に寄与した功績を称え、脳神経疾患研究所附属総合南東北病院院長補佐の加納宣康氏、カマチグループ創設者の蒲池眞澄氏、平成医療福祉グループ会長の武久洋三氏、東京都健康長寿医療センター理事長の鳥羽研二氏、JR東京総合病院名誉

院長の花岡一雄氏が受賞した。

又、「集中医療大賞・高久史磨特別賞2024」を、島根県隠岐島で僻地医療に取り組む自治医科大学地域医療学センター助教の白石裕子氏、隠岐広域連合立隠岐島前病院参与で島根大学医学部付属病院総合診療医センター長の白石吉彦氏が受賞。又、一昨年9月に急逝した第7代日本医学会会長の門田守人氏には、「集中医療大賞・特別賞2024」が贈られた。

ピアノ演奏で幕開け、音楽が繋ぐ医療と癒やし

今回のフォーラムでは、冒頭で初の試みとして医療従事者によるピアノ演奏が特別に企画され、日本赤十字社医療センターの中島淳院長が、リストの「ハンガリー狂詩曲第2番」とショパンの「小犬のワルツ」の2



見事なピアノ演奏を披露する日本赤十字社医療センター・中島淳院長。拍手喝采だった

曲を披露した。中島院長は5歳からピアノを始め、大学生時代には音楽教室の講師の資格を取得。音楽番組「題名のない音楽会」に出演してオーケストラと共演した経験も有る。現在に至る迄、東京大学「鉄門ピアノの会」のOBとして、大学の学園祭「五月祭」には学生と共にステージに立っている。又、日赤医療センターが主催する「オープンホスピタル」で毎年、中島院長自らピアノを披露し、癒しの活動に取り組まれている。この日も見事な演奏で参加者を楽しませた。

続いて、主催者を代表して集中出版代表取締役で『集中』発行人の尾尻佳津典が挨拶に立ち、フォーラムに先立って授賞式が行われた事を報告した。毎年の開催に当たっての、サントリーホールディングスを始めとする多くの企業からの応援や医療関係者からの支援に感謝の意を示すと共に、厚生労働省、日本医師会、日本看護協会、毎日新聞社、各国駐日大使館等、多くの方々からの後援に対して謝意を述べた。更に、これらの支援と協力が開催に向けた原動力となった事を強調した。その上で、フォーラム開設前の25年前に遡り、病院や福祉施設を癒やしの場とする活動の起点となった英国病院視察について語った。英国の主要医療法人では美術大学出身のアート専門スタッフを採用している他、患者が医療・福祉施設へ絵画を寄贈する習慣が定着していた。又、定期的なアート作品の入れ替えには地域住民も参加する等、アート・イン・ホスピタルの活動が英国の歴史と共に発展して来た様子を紹介した。更に、日本に於いても過去30年間で医療・福祉施設的环境が大きく変化し、各所に癒やしの環境が生ま

れている事に触れ、自身達の活動がその一助となっている事への期待を述べた。

最後には、会場を訪れた各国大使館関係者に向けて英語でスピーチし、フォーラムの成り立ちや活動について説明した上で感謝の意を伝えた。

日本の医療の未来を見据え、受賞者へ敬意

次にフォーラム実行委員会の理事を代表して、元環境大臣で弁護士の前田義昭氏、元内閣府副大臣で医師の三ッ林裕巳氏、日本医学会会長を務める虎の門病院院長・門脇孝氏も挨拶に立った。3氏とも集中出版が主催する医療勉強会「日本の医療の未来を考える会」に参加しており、前田氏と三ッ林氏は最高顧問、門脇氏は医師団代表を務めている。2016年4月に設立し、毎月開催する同勉強会は、医療に関する幅広い事案をテーマに取り上げ有識者による講演を行い自由な意見交換を行っている。

最初に登壇した前田氏は、受賞者達の地道な活動と確かな業績を評価。特にコロナ禍に於ける医療機



主催者代表・尾尻佳津典の挨拶で幕を開けた



表彰状を手に壇上で紹介を待つ受賞者



原田義昭氏

関係者の献身的な奮闘に感謝の意を示した。又、今後の感染症への備えの重要性を指摘すると共に、日本の医療の質の高さが国民生活の安心に繋がっていると述べ、受賞者の功績と医療従事者の日々の努力を称えた。続いて、三ツ林氏は、日本の医療制度が国民皆保険制度を基盤とし、弱者への配慮と自由な病院選択、高額療養費制度等の負担軽減策を備えている事を説明。改善の余地を認めながらも、世界に誇れる制度であると評価した。更に、医療・福祉施設に於ける心の癒やしの重要性に触れ、アートの果たす役割を強調。癒やしと安らぎの環境作りに尽力して来た受賞者らへの敬意を示した。

最後に門脇氏が挨拶に立ち、医療福祉現場へのアート導入と環境配慮型の施設作りに取り組んだ環境

賞受賞者への感謝と敬意を表明。受賞者達が今後も癒やしを提供し続ける事への期待を示した。又、社会貢献の実績を持つ集中医療大賞受賞者5名の長年の努力を称え、更なる活躍を願った。加えて、



三ツ林裕巳氏

高久史磨特別賞を受賞した離島医療の実践者2名についても、地域医療の担い手としての今後の活動に期待を寄せた。続けて、特別賞を贈られた日本医学会第7代会長、故・門田守人氏についても触れ、門田氏が医療や医学の発展に残した多大な足跡を振り返った。門脇氏は第8代会長を担う身として、門田氏から受けた教養を継承し、日本の医学発展の為に尽力する決意を表明。日本臓器移植ネットワーク理事長を務める等、日本の医療・医学の中心として活躍した故人の功績を偲んだ。

この他この日列席した、参議院議員の和田政宗氏、実行委員会理事として、東京大学名誉教授で工学院大学名誉教授、ハピネスライフ財団理事長の長澤泰氏、日本正大光明企業合同会社社長の徐志敏氏、歌手の麻倉未稀氏が紹介された。受賞者らと実行委員会理事の記念撮影が行われ、盛況の内に式典は幕を閉じた。

その後は、恒例の「癒しと安らぎの環境」チャリティコンサートが開催され、林美智子さん、本多信明氏、山岸茂人氏ら一流アーティストによる数々のクリスマスの名曲が演奏され、厳かな雰囲気の中、参加者は美しい音楽に包まれる一時を楽しんだ。終演後に寄せられたチャリティの金額は、総額43万1156円となり、今年も全額を日本赤十字社に寄付した。



門脇孝氏

授与式・懇親会

フォーラム前に、サントリーホールの小ホール「ブルーローズ」で、授与式と受賞者らによるブッフェ形式の懇親会が開催された。会場内のステージで、当フォーラム代表の尾尻佳津典より、受賞者1人1人に祝いの言葉と共に賞状が授与された。続いて、尾尻の発声で毒入りのスパークリングワインを掲げ乾杯し、受賞者、過去受賞者、理事らのご家族や関係者と共に交流し親交を深め、会場は温かな祝福ムードに包まれた。



受賞者とその家族、関係者で盛り上がった懇親会

医療や福祉の現場に感謝と敬意を表して毎年開催している「癒しと安らぎの環境」フォーラムでは、アート活動等を通じて癒やしの空間作りに取り組む医療施設に対し「癒しと安らぎの環境賞」を、最前線で医療界に貢献して来た医療従事者には「集中医療大賞」を、そして僻地医療に尽力して来た功労者に対しては、日本の医療界、医療教育、及び地域医療に尽力された高久史磨先生と設立した「集中医療大賞・高久史磨特別賞」を、それぞれ贈呈している。2024年の受賞施設・医療従事者から寄せられたコメントを紹介する。

癒しと安らぎの環境賞

※掲載は50音順・敬称略。肩書は2024年10月1日の受賞者発表時のもの(以下同)



後列左から：尾尻佳津典、門脇孝氏、三ツ林裕巳氏、原田義昭氏、和田政宗氏、長澤泰氏、徐志敏氏、麻倉未稀氏

独立行政法人国立病院機構 四国こどもとおとなの医療センター

地域のシンボルであるクスノキや、自然のエネルギーをテーマとしたアートを通じ、患者やスタッフに癒しを提供し、地域と共に医療環境を向上させている事に対して顕彰。



今回の受賞は、当院がホスピタルアートを取り入れて10年の節目というタイミングで、これまでの取り組みが実り評価されたものと大変嬉しく思っております。当院は、成人医療と成育医療、重症心身障害者に医療を提供できる複合型の病院であることを特徴としてお

り、成育医療部門では、香川県の小児救急救命センター、総合周産期母子医療センターとして、県内外にも広く3次救急を含む医療を提供しています。また、成人医療部門では、医療圏の中核病院として救急医療、脳卒中・循環器病センター、骨運動器センターなどを開設しており、加えて国立病院機構の特徴である重症心身障害など、他の医療機関ではアプローチが困難な分野の医療も提供しています。当院で育んできたホスピタルアートは、患者や医療スタッフおよび地域住民が手を取りあって関わる全員参加型の「病院づくり」であり、院内に存在するすべてのアートは、これまで当院に関わったすべての方の思いが詰まった、患者の快復と幸せを祈る医療スタッフの「想い」の結晶です。今後も、「癒しと安らぎの環境賞」を受賞した病院として、当院のホスピタルアートは、さらに地域に根差したものに発展させていく所存です。



前田 和寿 院長

学校法人聖マリアンナ医科大学 聖マリアンナ医科大学病院

先端医療とキリスト教精神を両立し、キッズアートプロジェクトや動物介在療法、自然をモチーフにしたアートで患者に癒しを提供している事に対して顕彰。



当院が取り組んできたホスピタルアートは、患者さんやそのご家族に少しでも癒やしとなるよう2019年頃より始めました。小児病棟をはじめ渡り廊下や待ち合いの窓ガラスに心とむ絵画が描かれました。23年に新入院棟に移ったのちも小児病棟や小児手術室の壁に

は「マリアンナの丘」と名付けられた絵画が描かれ、新外来棟から入院棟へとつながる1階には、スタジオや5枚の巨大モニターをそなえたTsunagaru Loungeを設置いたしました。このほか患者さんやご家族が共に過ごすダイニングには国産木材を使用した家具を配置。勤務犬については、15年より動物介在療法の一環として導入し、初代ミカ(黒のスタンダードプードル)、2代目モリス(白のスタンダードプードル)から、現在は3代目ハク(白のゴールデンレトリバー)に引き継がれて活動を続けております。希望する患者さんの元で共に過ごしたり、手術が必要なお子さんには手術室で麻酔がかかるまで寄り添ってくださりしております。勤務犬の活動は、患者さんだけでなくご家族や、ときに教職員まで癒されております。当院は、これからも患者さんのニーズにあった医療を癒しと共に提供していきたいと思っております。



大坪 毅人 病院長

公益財団法人筑波メディカルセンター 筑波メディカルセンター病院

患者や医療スタッフ、地域住民、筑波大学の学生らとの交流を通じ、無機質な病院内に癒やしの環境を創出し、医療空間の質を高める活動に対して顕彰。



本賞の受賞理由として、「アート・デザイン活動を通して、患者の心を和ませ、医療スタッフが働きやすい空間作りに取り組んだこと」が挙げられているとお聞きしました。筑波大学のアート・デザインプロデュース演習(ADP)との協働で、筑波メディカルセンターが

アート・デザイン活動に2007年に取り組みで17年目を迎えます。この活動は、2人の人物、故・中田義隆先生(名誉代表理事)と蓮見孝先生(筑波大学名誉教授)の出会いから生まれました。中田先生は白い壁と天井、金属製のドアという殺風景で冷たい病院の環境を何とかしたいと考え、蓮見先生に相談したところ、筑波大学芸術系の学生による「きりり ひらり ふわり」展を皮切りに、若い柔軟な発想のアート展が開催されるようになりました。その後、アート作品展示に止まらず、病院前庭「紡ぎの庭」の作庭や緩和ケア病棟の「家族控室」の改修など、病院の環境整備に職員と学生たちが一緒になって取り組んできました。ADPは職員の環境への意識も変えました。そして、11年にはアート・デザイン活動を担当するアートコーディネーターが生まれ、今日までワークショップやADPの様々な企画を担当しています。



志真 泰夫 代表理事

日本赤十字社 東京かつしか赤十字母子医療センター

環境配慮型の災害対応病院として安全性を重視し、下町らしい空間作りで患者に癒しを提供。充実した周産期医療と職場環境の整備への取り組みに対して顕彰。



当院は「赤十字精神に基づき女性と子どもとそしてその周囲の人と環境にやさしい病院」を理念に掲げ、それをハード面から具現化するために、葛飾区の協力の下、2021年6月に区立図書館跡地に新築移転しました。災害時にも地域の周産期医療の中核の役目を果た

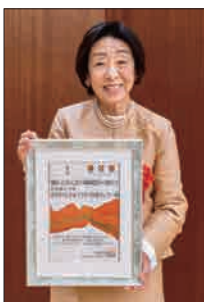
社会医療法人同仁会 耳原総合病院

戦後から「無差別・平等」の医療を実践し、「希望のともしび」をテーマにした文化活動で、医療者と地域が支え合う環境作りを進めている事に対して顕彰。



当院がホスピタルアートを導入したのは、2015年に現在の病院建物へ建替え移転を行う数年前のことでした。ある職員の、病気がたたかう場である病院にも日常のなかにある小さな幸せを感じられるものがあたら良いな、そんなささやかな願いからの提案がきっかけです。その後、現建物の建設を進めていくなかで、病院を「地域のシンボル」にしたいという思いから、さらに活動を広げていくことになりました。エントランスでは、地域住民・患者さん・職員1人ひとりがメッセージを書いたハート型のピース1万9000枚でつくった「希望の芽」がお出迎えしています。1階待合は、床面と壁面にアートを散りばめ、来院者だれもがアートに触れられる場となっています。各エレベータフロアに地域の地名(百舌鳥)の由来となったモズの絵を壁画として描き分け、各階を特徴づけています。そして病室には「希望の灯」をコンセプトに全国から寄せられた作品を掛け、入院患者さんの癒しや希望につながっています。ご紹介しきれないほどの作品が院内には溢れています。しかしこれも完成形ではなく、職員の希望などをもとに新たな作品が生まれていることも、当院のホスピタルアートの長です。

せるよう発電設備は屋上に、主な医療機器は2階以上に設置しました。母子の安全性を担保した快適な出産のため、分娩室・手術室とNICU・GCUを1フロアに集約して急変時の迅速な対応を可能とし、母子が気兼ねなく入院生活を過ごせるよう個室の療養環境を用意しました。また、質の高い母子医療を保ち続けるスタッフへの職場環境の快適性を考慮し、スカイツリーが見える4階に職員食堂・スタッフルームを設けました。病院のデザインは、当院の下町という立地から「和レトロ」という造語をキーワードに、格子のモチーフなど懐かしさと親しみを感じられる落ち着いたコンセプトカラーで什器やホスピタルアートにも統一感を持たせました。また病院1階に区立図書館を併設したことで知的好奇心を育む環境が整い、これからは周産期医療の提供のみならず母子の全人的ケアの一翼を担っていきたいと思っております。



三石 知左子 院長



河原林 正敏 病院長

けです。その後、現建物の建設を進めていくなかで、病院を「地域のシンボル」にしたいという思いから、さらに活動を広げていくことになりました。エントランスでは、地域住民・患者さん・職員1人ひとりがメッセージを書いたハート型のピース1万9000枚でつくった「希望の芽」がお出迎えしています。1階待合は、床面と壁面にアートを散りばめ、来院者だれもがアートに触れられる場となっています。各エレベータフロアに地域の地名(百舌鳥)の由来となったモズの絵を壁画として描き分け、各階を特徴づけています。そして病室には「希望の灯」をコンセプトに全国から寄せられた作品を掛け、入院患者さんの癒しや希望につながっています。ご紹介しきれないほどの作品が院内には溢れています。しかしこれも完成形ではなく、職員の希望などをもとに新たな作品が生まれていることも、当院のホスピタルアートの長です。

集中医療大賞



加納 宣康

一般財団法人脳神経疾患研究所附属総合南東北病院 院長補佐

日本人で初めて米国外科学会 INTERNATIONAL GUEST SCHOLARを受賞し、がん治療の名医として内視鏡手術の技術向上と医師育成に尽力した事に対して顕彰。



期待できることに大きな可能性を見出し、その技術の

医師となった1976年以来、「24時間、365日、休みがあったら損と思え！」という信念で、手術を通じた治療に全力を尽くしてまいりました。内視鏡下手術と出会い、開腹手術以上に精緻な手技が可能で、術後のQOL向上が

習得と普及に努めてまいりました。また、臨床経験を広く共有し学び合うため「症例報告」を重視する姿勢を貫き、この理念のもと後進の指導に力を注いだ結果、多くの優秀な医師を育成することができました。93年に米国外科学会の International Guest Scholar に、日本人として最初に選出されたことは、私の誇りでもあります。外科臨床に励むと同時に、学問的業績を残すことにも努力した結果、全国学会だけでも6学会の特別会員に推薦いただきました。この間、仕事に夢中になるあまり、健康が犠牲となり、心筋梗塞、脳腫瘍、2回の脳出血などで倒れたことは、反省点です。現在は、既往歴からも年齢的な要因からも、手術治療以外にも興味を広げ、高齢者医療にも携わっています。

蒲池 眞澄

カマチグループ 創設者

グループ開設以来、24時間365日救急医療に尽力、更に社会復帰の為に早期リハビリの有効性に着目し、いち早く導入。患者の尊厳を重視した医療で社会に貢献した事に対して顕彰。



戦争の負傷者より高いとさえ言われていました。その

私が開業した1974(昭和49)年当時、福岡・北九州周辺の救急医療体制は極めて貧弱で、標準的な治療を行えば助かる命が「たらい回し」による手遅れで失われる状況でした。交通事故にあえば、その死亡率はベトナム

ような状況の中で私は、他の病院が受け入れない患者さんを積極的に受け入れ、持てる技術と知識の限りをつくして治療し、「たらい回し」をなくしました。リハビリについては、当時、手術直後の患者は絶対安静とされていましたが、当院に勤務していた若いセラピストの助言で、手術後から積極的にリハビリを行いました。すると、患者が早期に回復・退院でき、限られた病床の回転率が向上して、さらに多くの救急患者を受け入れられるという好循環が生まれました。開業して50年、カマチグループは急性期・回復期病院25、大学1、専門学校5、職員数1万5000人を擁するまでに発展しましたが、今後とも原点を忘れず「大和民族」のための医療を実践して参ります。

武久 洋三 平成医療福祉グループ 会長

1984年に博愛記念病院を設立し、「患者を見捨てない」の理念で慢性期医療を展開。経営手腕を活かし平成医療福祉グループを築き、医療発展に貢献した事に対して顕彰。



私は半生を高齢者慢性期医療に従事してきました。紹介患者は急性期入院中の環境により低栄養や脱水、要介護度などの障害を受けた患者ですが、絶対に見捨てないという気持ちで、その多くを在宅復帰させてきました。これまで急性期医療の改善と慢性期医療の重要性を訴

鳥羽 研二 地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター 理事長

国立長寿医療研究センター病院長・総長・理事長を歴任し、認知症治療のパイオニアとして老年医学を牽引。日本の健康長寿の実現と高齢者医療に貢献した事に対して顕彰。



表彰の知らせを受けて、「どうしようか?」というのが、正直な感想である。こうした選考では、むしろ中堅を推薦してきた手前、面映い思いもあった。しかし数年前、杏林大学名誉学長の跡見裕先生の推薦で『集中』にインタビューしていただき、当時社会的認知が今ほどではな

花岡 一雄 JR東京総合病院 名誉院長

皇室医療に携わり厚い信頼を得ると共に、自身の経験を活かし疼痛医療の第一人者として、多くの慢性疼痛患者に希望をもたらし、治療に貢献した事に対して顕彰。



病院を受診する患者さんの8割は痛みを有していると言われてます。手術のような急性侵害刺激は当然のことながら強い痛みが想像されますが、一見何の障害もなさそうでも痛みを訴えられる慢性疼痛患者さんは約2000万人と言われており、その生産損失は約4兆円

えて来ましたが、今年の報酬改定で、病院での治療環境の改善に焦点を当ててくれたので、今後は要介護者が減り、健康寿命の延伸に期待が持てるようになりました。昨年、「癒しと安らぎの環境」コンサートとして、六本木ケントスでのパーティーの案内を受け取りました。驚きましたが、我が青春のロカビリーとツイストの記憶が蘇り、フロアで昔を思い出して踊りました。硬い医学誌主催のパーティーにも拘らず、この粋な計らいに共感を覚えております。『集中』の医学全般を斜めに見ながら、独特の記事に興味を持って読んでいますが、今回の受賞は無上の喜びです。学者でもなく評論家でもなく、単なる市井の医療の実践者に目を向けてくださり、心より感謝しております。

かった国立長寿医療研究センターを取り上げていただいたことは大いに感謝している。若い時から今まで高齢者を対象に「地を這うような臨床研究」を泥臭く続けてきた。仲間とともに、倉庫とは名ばかりのゴミ捨て場のような病歴棚から高齢者の入院から退院までの徴候をこまめに調べた研究は、後に「老年症候群の加齢変化」として、多くの教科書に記載されている。また、高齢者の療養病床での看護時の患者の印象からヒントを得て「意欲の指標：Vitality Index」を論文にすることができ、後に高齢者の総合評価指標として、保険収載されることになった。臨床現場では今でも多くの実地研究が進んでいる。この表彰が、同好の志の励みになってくれれば、望外の幸せである。

と試算されています。まだペインクリニックという名前が我が国に浸透する前の1973年の暮れ、米国東海岸Yale大学医学部麻酔科にレジデントとして留学しました。そこでの研究が脊髄後角Rexed第V層単一細胞の活動を対象とした電気生理学でした。それまで、モルヒネは上位中枢に作用することは知られていましたが、脊髄にも作用部位があることを証明しました。その後、臨床的にオピオイドのクモ膜下腔や硬膜外腔投与に繋がり、脊髄鎮痛法として幅広く応用され現在にも至っています。また、麻酔薬や鎮痛薬の臨床開発にも広く携わってきました。その上麻酔科医として、皇室の方をお世話させて頂く機会がございましたことは光栄の至りです。

集中医療大賞・高久史磨特別賞 2024

白石 裕子 自治医科大学地域医療学センター 助教

内科・外科・小児科医として、隠岐島で僻地医療に20年間に亘り尽力。離島で働く女医として情報発信を続ける傍ら、不登校児童支援教育等にも貢献した事に対して顕彰。



自治医科大学を卒業後、約20年間離島医療に従事しました。急性搬送からお看取りまで、また予防接種や健診等の予防活動に生きづらさや障害を抱える方の対応など、求めに応じて懸命にこなす日々でした。これは先輩方から受け継いだ、へき地医師の一般的なスタイルで

白石 吉彦 隠岐広域連立隠岐島前病院 参与 島根大学医学部附属病院総合診療医センター長

理想的な僻地医療の実現への取り組みと、東日本大震災で自治医大卒業生と共に被災地医療に貢献した事に対して顕彰。



このたびは、自身が歩んできた道を評価していただいたことに大変感慨深く、医療に対する情熱と努力が結実した瞬間であると感じています。これは、私個人だけでなく、共に歩んできた仲間や指導者、そして患者さんたちのおかげであり、彼らとの絆がこの成果に繋がった

集中医療大賞・特別賞 2024

故・門田 守人 第7代日本医学会 会長、大阪大学 名誉教授



1945年広島県生まれ。70年大阪大学医学部卒業。79年同大助手(外科学第2)。同年米メモリアル・スローン・ケタリングがんセンター留学。87年大阪大学講師。90年同助教授。94年同教授。99年大阪大学大学院教授。2007年大阪大学理事・副学長。11年がん対策推進協議会会長。12年がん研究会理事・有明病院院長。15年日本臓器移植ネットワーク理事長。16年堺市立病院機構理事長。17年日本医学会連合/日本医学会会長。

あると思います。ママ女医として人生に寄り添いながら、島の人々からは人情あふれる育児・家事支援を受け、ワークライフバランスにも関心をもちました。女医のパワーの源、仕事の続け方などを議論し、現在は母校で意識改革や啓発に取り組んでいます。働き方改革で長時間労働が見直され、適切な働き方、休み方を模索する好機な一方、育児や家事には、無償の“work”といえる部分があり、これらのシェア、タスクシフトを行うには、男性、女性ともに意識改革が必要です。『集中』では、医療、社会、経済など多面的かつ横断的に、また、へき地でも都会でも、人々が“働きやすく、休みやすく、人を育てやすく、生きやすい”社会の実現を目指していただくことを期待しております。

と強く思っています。現在私が力を注いでいるのは、地域医療における総合診療医の育成と、医療の質を高めるための持続可能なシステムの構築です。特に、地域住民に寄り添う医療を実現するため、次世代の医師たちが自信を持って医療に取り組めるような環境づくりに努めています。日本のへき地は課題先進地と呼ばれるべき場所であり、人口減少や高齢化など深刻な問題が現れています。こうした地域での総合診療は、医療だけでなく、地域全体の課題解決に大きな役割を果たしています。多様な健康ニーズに応え、地域住民と密接に関わりながら、医療を超えた社会的な問題にも対応することで持続可能な地域社会の構築に貢献する総合診療医の育成の支援をぜひお願いします。

「癒しと安らぎの環境」コンサート 2024

「癒しと安らぎの環境賞」「集中医療大賞」の表彰式後は、一流アーティストによる演奏が行われた。今年も、医療従事者に加え、日頃はコンサート会場に足を運ぶ機会に限られる患者やその家族も、素晴らしい音楽に触れ音楽を楽しむ機会となった。



故・日野原重明先生に命名された当フォーラムは、アートや音楽を取り入れる事で医療施設が癒しと安らぎの環境になる事を願い立ち上げられた。

当コンサートは、日野原先生が推奨された音楽療法の役割を担い、「癒しと安らぎの環境」の理念を音楽を通じて体現するものである。精神障害を持つ患者、がんを患う患者、そして患者の家族等、日頃コンサート会場へ足を運ぶのが難しいと感じる方々にも、一流奏者の生演奏を聴く事で癒されて欲しいと願いご招待した。例えば、感動して感情が高まり声を発する患者がいても構わず、子供の患者も親と一緒に音楽を楽しめる。今年も1600名余りが来場し、温かい雰囲気の中、音楽の力が人々の心に深く届いた時間となった。

今回は、メゾソプラノの林美智子さん、テノールの本多信明氏、ピアノの山岸茂人氏が出演した。毎年出演している、当フォーラムの理事でテノールの佐野成宏氏は、急性咽喉炎及び声帯炎の為出演を見送ったが、開演前にステージに立ち、来場者へ直接お詫びを述べると共に、本番前日に代役を務める



司会の鈴木光代さん

事となった愛弟子の本多氏を紹介。佐野氏は「本多君は、多くの実績を積んで来た才能有る素晴らしいテノールです」と述べた。本多氏は名古屋大学医学部を卒業し、現在は国際医療福祉大学の山王メディカルセンター・東京ボイスセンターに所属する現役の医師でもある。本多氏の出演は、音楽と医療の融合を掲げる本フォーラムの趣旨に正に合致した。又、国内外の数々のコンクールで受賞し有名オペラの主役を務める等、テノールとしての活動も広く評価され、その実力は折り紙付きである。奇跡とも思える交代劇が舞台裏で行われていた。

第一線で活躍し続けるメゾソプラノの林さんは、数々のオペラやコンサートに出演し、国内外で高い評価を受ける実力派。豊かな声量、美しい歌声と類稀な表現力で、今回も聴衆を魅了した。特に今回は、林さんの温かな人柄と包容力が出演者同士の心と聴衆を繋ぎ、コンサート全体に調和をもたらした。その姿は正に聖母マリアの様であった。

ピアノ伴奏を務めた山岸氏も又、国内外の舞台上で活躍するピアニストであり、演奏者達の魅力を引き立てる繊細で力強い音色を響かせた。

今回も誰もが親しみやすいクリスマスの名曲で構成され、華やかに、そして時に繊細で優しい調べに心癒やされ、会場が笑顔と心温まる感動に包まれた。



この日挨拶に立った佐野成宏氏。ご冥福をお祈りします



メゾ・ソプラノ 林 美智子さん



テノール 本多信明氏



〈演奏曲〉

オンブラマイフ (G. F. ヘンデル作曲)

私を泣かせてください (G. F. ヘンデル作曲)

天使のパン (C. フランク作曲)

アヴェ・マリア (C. F. グノー / J. S. バッハ作曲)

カヴァレリア・ルスティカーナ間奏曲 (P. マスカーニ作曲)

月によせる歌 (A. ドヴォルザーク作曲)

冷たき手を (G. プッチーニ作曲)

星に願いを (L. ハーライン作曲)

さやかに星は煌めき ~オーホーリーナイト~ (A. アダン作曲)



〈お知らせ〉

「癒しと安らぎの環境」フォーラム表彰式、及び「癒しと安らぎの環境」コンサート2024の様子は、YouTube「集中チャンネル」にて2025年2月上旬より期間限定・無料配信致します。視聴をご希望の方は右下のQRコードからチャンネル登録を是非よろしくお願い致します。



©SHUCHUchannel

追悼 急逝した佐野成宏さんを偲ぶ

光り輝く声よ 永遠に

音楽は癒やしに必要だという名誉会長・日野原重明氏の要請で、テノールの佐野成宏氏に当フォーラム創設時の2000年から理事を務めて頂きました。長きに亘り「癒しと安らぎの環境」コンサートに出演し続けて下さった佐野氏が、2025年1月10日午前2時37分に急性心不全にて急逝されました。享年59歳。謹んでご冥福をお祈り致します。「お別れの会」を都内で開催致します。詳細は追って弊社よりご案内致します。



ソプラノ 北野智子さん

特別編成 アンサンブル・ミノープル

ソプラノ 森麻季さん

ピアノ 山岸茂人氏

メソソプラノ 林美智子さん

ソプラノ 森麻季さん

中央 森麻季さん、右 林美智子さん

ピアノ 河原忠之氏

ヴァイオリン 川井郁子さん

本コンサートは、理事の佐野氏を中心に、当会の趣旨に賛同して下さる日本を代表する一流アーティストとの共演で、毎年華やかに開催された



佐野成宏(さの・しげひろ)

長野県駒ヶ根市出身、1965年生まれ。東京藝術大学声楽科卒業後、アリゴ・ボイト音楽院に留学。1992年の関西日伊コンクール第1位・ミラノ大賞を受賞。93年のF・ビニャス国際声楽コンクール第3位等、数々のコンクールに入賞後、世界各地でコンサートやオペラに出演。2001年にローマ歌劇場にてプッチーニ「つばめ」に招聘され出演。「天皇后両陛下ご成婚50周年ご即位20周年記念祝賀コンサート」、佐渡裕氏プロデュースによるオペラ「カルメン」、静岡グランシップオペラ「椿姫」、三枝成彰氏作曲のオペラ「忠臣蔵外伝」、2014年9月には佐藤正浩指揮ヴェルディ作曲「DON CARLOS」フランス語5幕版日本初演に、タイトルロール・ドンカルロス役で出演、音楽性豊かな歌唱で観客を魅了した。近年は、後進の育成にも力を注ぎ、多くの若手音楽家に影響を与えた。東京音楽大学特任教授、Univ. Cambridge Japan Academy 芸術教授。駒ヶ根高原音楽祭主宰を務めていた。

©稲越功一